

入阿毘達磨論の註釈書について

百 濟 康 義

はじめに 『入阿毘達磨論』の註釈書は、日本人による釈を別にすれば、チベット訳完本で残る著者不明の *Sārasamuccaya nāma Abhidharmāvatāra-ṭīkā*¹⁾、さらにトカラ語AとBによる書名・著者不明の註釈書断片計4葉、すなわち Toch. A No. 384-386²⁾と Toch. B No. 197³⁾の存在が知られているにすぎない。

筆者はこのほどウイグル訳仏典中にも『入阿毘達磨論』の註釈書断片が7葉存在することを見出した。これらウイグル字資料のローマ字転写・翻訳・語彙等の研究は近い将来発表の予定である。本稿では、これら新資料の紹介とこれに絡む若干の問題について拙見を記したい。

ウイグル字資料 7葉のうち4葉は、筆者が1979年10月ストックホルムの民族学博物館所蔵のスヴェン・ヘディン将来ウイグル写本を調査中に発見したものである。これら写本には整理番号が与えられていないので、本稿では筆者が報告書として作成提出した仮目録⁴⁾に従って説明することにする。略号 H(edin) Ms.

また残余の3葉は、羽田亨氏によつて撮影・保管されていたウイグル写本の写真集に見出したもので、現在の所蔵地・所蔵者などは不明である。これらの写真資料を利用し得たのは、羽田明、小田寿典の両氏の御好意によるものであることを記し、感謝の意を表わしたい。略号 H(aneda) Photo.

上記7葉の写本の外形的特徴と、引用註釈される玄奘訳『入阿毘達磨論』(T. No. 1554, Vol. 28. p. 980b-989a)中の平行文の所在を記せば次の如くである。略号 R.=表, V.=裏。

(1) **H. Ms. No. 21** 32.9×21.6cm. 冊子型紙本・完葉。ウイグル字草書体。問、答などの漢字混入。R. 17, V. 18行。葉番号:「十一」。V. 1-2=p. 980b23 [敬禮一切智, 仏日無垢輪]

(2) **H. Ms. No. 22** 14.8×34.7cm. 貝葉型紙本(紐通し穴なし)・ほぼ完葉。ウイグル字楷書体。論日, 解日などの漢字混入。R. 44, V. 44行。葉番号: šip lun baštīnqī toquz qīrq [‘入論’第1(卷), 39(葉)]。V. 11-12, 18-21, 33-35, 44=p. 981b5-8 [如是八種……不律儀者, 謂諸屠兒]

(3) **H. Ms. No. 23** 14.6×34.6cm. 貝葉型紙本(紐通し穴なし)・完葉。ウイ

グル字楷書体。論日、解日などの漢字混入。R. 49, V. 49 行。葉番号: ikinti bir ygrmi [第2 (巻), 11 (葉)]。R. 2-7, 15-19, 21-46=p. 982c26-983a10 [慢結者……総名慢結]

(4) **H. Ms. No. 24** 14.1×34.7cm. 貝葉型紙本(紐通し穴なし)・完葉。ウイグル字草書体。論日、解日などの漢字混入。R. 48, V. 44 行。葉番号: 「入論 巻中 十一葉」。R. 39-43, V. 2-7, 26-32=p. 982c21-26 [結有九種……是名悉結]

(5) **H. Photo. No. 20** 寸法不明。断片 (中央部)。ウイグル字草書体。論日、解日などの漢字混入。R. 19, V. 19 行残存。R. [20.2] 4-5, 16-18=p. 981a3⁵⁾。

(6) **H. Photo. No. 25** 寸法不明。断片 (右端)。ウイグル字草書体。論日、解日などの漢字混入。R. 12, V. 12 行残存。R. [25.2] 5-7=p. 982a28⁶⁾。V. [25.1] 4-9=p. 982b3-4⁶⁾。

(7) **H. Photo. No. 28** 寸法不明。貝葉型(紐通し穴と円形あり)・断片 (左端)。ウイグル字草書体。論日、解日などの漢字混入。R. 25, V. 25 行残存。葉番号: 「入論 下 ///」。R. [28.2] 2-6, 24-25=p. 985c11-12⁷⁾。V. [28.1] 6-9, 16-17, 24-25=p. 985c14-16⁷⁾。

論説

A) チベット語、トカラ語 A・B, ウイグル語で残存する註釈書の内容の相互関係について言えば、①トカラ語註は、先ず『入阿毘達磨論』よりサンスクリットで短文あるいは術語を引用し、次にそれをトカラ語に翻訳し、続いてトカラ語でそれに註釈文を加えるという三段の様式を採っている。このサンスクリット引用文によって明らかな所釈の本文は、A註が行句義中の慧・尋・伺・放逸・不放逸・厭・欣・輕安・不害・慚の部分 (T. p. 982a, b), B註が受句義の昌頭部「受句義者、謂三種領納……能為愛因故名受」(T. p. 981c8-11) である。これらトカラ語 A・B による註釈文をチベット訳 Sārasamuccaya と比較するに、註釈内容は一致しない。②ウイグル語註は、チベット訳 Sārasamuccaya と部分的に対応する箇所もあるけれども、全体的な一致を認めることはできない。③トカラ語 A・B 註とウイグル語註は、残存する註釈部が異なるため比較することができない。④故に現在のところ、チベット語、トカラ語 A・B, ウイグル語の註釈書間に相互の一致関係～同一の典籍であるという証跡を見出すことはできない。

B) ウイグル字資料7点のうち(1)を除く余の6点は、文体、翻訳様式、写本の外形的特徴及び葉番号の検討から判断して、もともと同一のウイグル語原典に起原するものと考えられ、これら6点は(2)-(3), (4), (5)-(6)-(7)の3種の異写

本から成つていと認められる。資料(1)は、問答体で記述されている点と文中に記入された漢字のほとんどがウイグル語で訓読されている点(論説D③の例文を参照せよ)に特異点がある。しかしその問答体が「解日」で始まる註釈文の一部と想定した場合(『俱舍論実義疏』ウイグル訳本では「釈日」で始まる註釈文中で問答がなされるのは通例のことである)、また比較的後期の書写になる仏典では簡単な漢字はそのままウイグル読みされる傾向にあることを考えれば、他の6点と同じ論書の後期の異写本とすることは十分に可能である。筆者は現在のところ(1)を第4の異写本と考えている。上記7点の各資料の書写年代等については、これを決定するに足る証跡は見つかっていない。

C) 上記のウイグル語資料はすべて漢文の原典より訳出されたものである。このことは次の諸点より確認される。①資料(2)～(7)はいずれも「論日」と漢字で記し『入阿毘達磨論』の論文を引用翻訳した後に、「解日」と漢字で記し釈文が訳されている。②註5-7で例示する如く、時には「論日」「解日」の直後に論文の一部が漢字で引用されることもある。③さらに資料(2)では「解日」で始まる釈文中に正学律儀に関して‘すなわち Vinaya-kārikā で説く’と述べ、漢字で「不獨在道行」と記し、続いて二偈十二行が引用翻訳されているが(H. Ms. No. 22, R. 25-36)、これらの偈は『根本有部百一羯磨』(T. Vol. 24, p. 461a, p. 596b)などに見出される「不独在道行, 不独渡河水, 不故触男子, 不与男同宿, 不為媒嫁事, 不覆尼重罪」「不捉於金等, 不除隱处毛, 不掘於生地, 不壞生草木, 不受食不食, 曾触不应食」と全同である。④資料(1)は「問」「答」と漢字で記して始まる問答体で書かれており、文中にはこの他に「喩」「智」「仏」「礼」「如是」など多数の漢字が引用されている。⑤上記4点で例示した本文中の漢字は、それが「論日」の論文部の一部であれ、「解日」の釈文部の一部であれ、もともと中国語の原典に存在していたもので、ウイグル語訳の際に‘見出し語’的な役割でウイグル訳文中に引用され、書写されてきたものと考えられる。

D) では、当面するウイグル語訳の原典となつたその漢文のテキストとはどのようなものであつたか。

① 巻数に関しては葉番号の記事、すなわち資料(2)「第1(巻)」, (3)「第2(巻)」, (4)「巻中」, (7)「(巻)下」を考慮すれば、この註釈書は、所釈の『入阿毘達磨論』上下二巻に対して、上中下の三巻本であつたことが判明する。

② 書名に関しては同じく葉番号の記事、すなわち資料(4)「入論」, (7)「入論」の漢字による書名と、資料(2)に見られるウイグル字 šip lun が同じく‘入論’

〔中古音 *ńźjəp* ‘luen’〕の音写であることよりすれば、この註釈書が『入論』なる論名あるいは略称を有していたことは明らかである。

③ 著者に関しては資料(1)中の帰敬偈解釈の次の文が手がかりとなろう。H. Ms. No. 21 R. 17-V. 5:

[R. 17] 問 上-ki 二 paṭak-lar-īṛ, kā [V. 1] vibakḍi, līṛ samaṣ ūzā yōrgülük ol titi, 何二 paṭak-lar-nī kā, vibakḍi, līṛ samaṣ ūzā yōrār, 答 aṛ-īr-īn [2] ayay-īn yūkünürmn tükäl bilgä bilig-kä, 仏-līṛ 日 tngri-kä kkir-siz aṛīṛ tilgān-lig-kä tigüci bo 二 paṭak[3]-lar-nī, kā, vibakḍi, līṛ samaṣ ūzā yōrgülük ol, 問 今 munda mitir-a-gupti 師 bo 礼 ślok-nī, kā vibak[4]-ti ūzā yōrūp, līṛ samaṣ ūzā yōrmāsār nāgü mün qadaṛ bolur ārti, 答 sikanṭili 師 tngri 仏 -qa yūkūn- miš bolmaduq, [5] tükäl bilgä bilig-kä yūkūnmiš bolur ārti,

[R. 17] 問。上の二句を与 [V. 1] 格 [Dative *vibhakti*]・有(財)釈 [*Bahuvrīhi samāsa*] によつて釈すべしと言つた。何の二句を与格・有(財)釈によつて釈すか。答。「尊[2] 敬をもつて我は礼す。一切智に、仏なる日天に、無垢な清き輪ある者に」⁸⁾というこの二句[3]を与格・有(財)釈によつて釈すべし。問。今ここで Mitra-gupta 師がこの礼偈を与格[4]によつて釈し、有(財)釈によつて釈さなければ、どのような過失が有つたか。答。Skandhila 師が天なる仏に未だ礼してはならず、[5] 一切智に礼したことになつた。

本文はこのあとも帰敬偈中のサンスクリットの格と複合語の解釈を続ける。まずこの註釈文に見出される sikanṭili (V. 4, 10, 11) 及び sikandili (V. 6, 8) は、ウイグル訳仏典におけるサンスクリット語音写に関する一般的傾向——この場合、語頭の二重子音を避け母音を介在させる、-a 終止の人名などは -i で表わす、帯気音を特別に表記せず無気音で表わす、t, d は交替し得るなど——を考えれば、skandhila と復原することが可能である。このウイグル語形は、周知の如く『入阿毘達磨論』の著者「塞建地羅」～「塞建陀羅」から一般に推定されているサンスクリット語形 Skandhila⁹⁾を支持するものである。少なくとも他の推定形 Sugandhara⁹⁾は、第1と第3音節の母音の相違並びに -l- 音の存在からすれば支持し得るものではない。

また mitir-a-gupti (V. 3, 11) なる語形は、サンスクリットの Mitra-gupta に復原するのが最も自然であると考えられる。この人物は上記の例文では第3人称で

表現されているけれども、ウイグル訳仏典——特にその論書——にあつては著者～註釈者をも第3人称で訳し説明する傾向があるから、この Mitra-gupta が当面する註釈書、少なくとも資料(1)の著者であつたことは明らかである。

E) しかしながら、『入論』なる書名あるいは略称を有する三巻本の註釈書が存在したという記録も、また Mitragupta なる人物が『入阿毘達磨論』に註釈したという記事もいまだ見出せない。筆者はこの理由をいわゆる中原未伝仏典の一例として解釈しようとしている。

すなわち、Mitragupta なるインド系学者による『入阿毘達磨論』の註釈書は中国仏教圈に持たらされ玄奘以後の時代¹⁰⁾に三巻本として漢訳されたことがあり、この漢訳本からやがてウイグル語訳本が敦煌～トルファン地域で造られた。ウイグル訳本は書写が重ねられ幾つかの写本は今日まで断片的に残り得たけれども、当の漢訳本は中国本土に未伝のまま、あるいは伝わつたとしても大蔵經に未収のまま散失してしまつた、と想定するものである。

この想定は類例を欠くものではない。敦煌～トルファン地域出土の仏典で中原未伝の漢本の事例をあげれば枚挙にいとまがない（例えば大正蔵85巻所収の数多くの仏典を見よ）。問題をウイグル訳本でも存在するアビダルマ論書に限つて『阿毘達磨俱舍論実義疏』で例示すれば、この Sthiramati 作の俱舍論註も玄奘以後に漢訳され、さらにウイグル語へ重訳されたことは確かであつて、敦煌の書窟からは、その漢訳本からのウイグル訳本断簡（230丁7015行分残存）が、漢訳本の抄本（大正蔵29巻所収『俱舍論実義疏』）とともに発見されている事実がある。また筆者がすでに発表した心所五十二法を説く特異なアビダルマ論書や未知の俱舍論頌註のウイグル訳本の断片も¹¹⁾、中国語本を原典とした訳本であつても原本が見当らず、当面する『入阿毘達磨論』註と同様の事例として挙げることができる。

要結 Skandhila 著『入阿毘達磨論』への Mitra-gupta なる学者による註釈書の存在したことが、その漢訳本（三巻本。未伝!）を経て重訳されたウイグル訳本の検討から、明らかになつた。

- 1) Chos mñon pa la hjug pa rgya cher hḡrel pa śñiñ po kun las btus pa shes bya ba (東北 No. 4097, 大谷 No. 5598).
- 2) 井ノ口泰淳「トカラ語の仏典」, ii. Abhidharmāvatāra-prakarāṇa 註断片, 『西域文化研究』 Vol. IV (1961) [別冊] p. 336-342.
- 3) 百濟康義「トカラ語Bによるアビダルマ論書関係の断片について—— I. Abhidharmāvatāra-prakarāṇa 註——」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』 No. 13 (1974) p. 21-35.

- 4) Kōgi Kudara, *A provisional catalogue of Uigur manuscripts preserved at the Ethnographical Museum of Sweden*, (未出版)。
- 5) [R4] (qaltı sav) ilig-tä ulatı-lar [5] (-ñing ün-i ärür).....[16] 論日後所生者 (kinki) [17]-sintin qayu tuymış-ı-ñing aq(ı bolur tud) [18]-yaq-sız mxabut tıl-daγ-lıγ///
 =謂語手等聲。後所生者名無執受，大種爲因。
- 6) [R5] 論日信謂令心 [6] (kirtgünč ärsä)r kim kqngül-tüg aqqaγu-larda [7] (amırqurdaçı süz)-däçi ärür tip, 解日..... [V4] kirtgünmäk burxan-qa tuyunm-aq/// [5] kirtgünmäk nom-qa, ärür ädgü tip/// [6] bursang quvraγ-qa, ärür yig s(oγançıγ)/// [7] tip, kirtgünmäk alqu tärs az(aq)/// [8] aşıuluq bolmış tıl-daγ-tın tur/// [9] tözin, bo ärür kirtgünč-nüng///
 =信謂令心於境澄淨……信佛證菩提信法是善說信僧具妙行。亦信一切外道所迷。緣起法性是信事業。
- 7) [R2]/// bögündürtäçi ämgäk-ig [3]/// (tirgi)n-ig mn tarqaru tükäqtim, [4]/// tükäqtim, yol-uγ mn bışrunu [5]/// (u)γur üzä ävrildäçi aqı [6]/// tip, 解日苦我已知.....[24]/// 論日有无漏/// [25]/// ärsär///.....[V6] 論日此後二智 bo kin(ki)/// [7] yinčürmäk işdämäk yörü(g)/// (töz)[8]-lüg ärmäz, adın-lar kqngül/// [9] körüm tözlüg ärür, 解日.....[16] (論日) 餘六 adın altı bilgä bilig./// [17]/// körüm ärmäz tözlüg ärür tip, ///.....[24]/// 論日 yılayu/// [25]/// (a)dın-lar kq(ngül)///
 =苦我已知，集我已斷，滅我已證，道我已修。盡行相轉名盡智。有無漏.....此後二智不推度故非見性，他心智唯見性。餘六智通見性非見性，世俗智唯有漏。他心智通有漏及無漏。
- 8) Ch. 敬禮一切智 佛日無垢輪 =Tib. thams cad mkhyen ñid dkyil hkhor dri med pa/ sañs rgyas ñi ma de la phyag htshal lo/
- 9) Skandhila, Sugandhara に関する最新の論究としては，M. Van Velthem, *Le traité de la descente dans la profonde loi (Abhidharmavaiśeṣaśāstra) de l'Arhat Skandhila*, (Louvain 1977) p. VII-XII を見よ。
- 10) 論説Cで述べた如く，「論日」で引用される論文は玄奘訳『入阿毘達磨論』のそれであることに由る。
- 11) 百濟康義 「五十心所を説くウイグル訳アビダルマ論書断片」『印仏研』26-2, 「ウイグル訳『俱舍論頌註』一葉」『印仏研』28-2。

(龍谷大学講師)